

お台場海浜公園で採取された底生動物、付着動物、魚類

石井裕一・和波一夫・木瀬晴美・安藤晴夫

【要約】お台場海浜公園において底生動物、付着動物及び魚類の生息状況調査を実施した。底生動物は潮間帯、潮下帯ともに個体数は少なく、底層水の貧酸素化の影響が示唆された。付着動物は海浜公園の外側と内側で出現種数に差異が認められた。また、東京都版レッドリストで絶滅とされているウネナシトマヤガイの生息が確認された。魚類は準絶滅危惧種となっているヒメハゼ、ビリングが確認された。また、これまで東京湾での生息が確認されていないガンテンイシヨウジが採取された。今後も継続的な調査が必要であると考えられた。

【目的】

海浜公園や運河は都民の身近な水辺であり、きれいな水質と多様な生物の生息が求められている場所でもある。都内海浜公園における生物生息状況の把握を目的とし、お台場海浜公園において、底生動物、付着動物及び魚類の調査を実施した。

【方法】

お台場海浜公園内に図1に示す10地点の調査地点(St.1~8及びSt.A1~A2)を設定し、2014年6月から9月までの高水温期に全6回(6月25日、7月10日、7月24日、8月8日、8月25日、9月8日)の調査を実施した。底生動物調査はSt.1~8、付着動物調査はSt.A1~A2、魚類調査はSt.1付近でそれぞれ実施した。

【結果の概要】

(1) 底生動物

潮間帯であるSt.1及びSt.2では個体数、湿重量ともにアサリ、ヤマトカワゴカイ、ドロオニスピオが優占することが多かった。一方、潮下帯のSt.3~St.8では、シズクガイ、ホトトギスガイ、ホンビノスガイやシノブハネエラスピオなど汚濁耐性があるとされる種が優占する傾向があった。全体として個体数は少なく、底層水の貧酸素化の影響が示唆された。

(2) 付着動物

付着動物は2地点の調査を通じて27種が出現した。St.A1とSt.A2の間で、個体数の差は小さかったが、種類数、湿重量はSt.A2の方が比較的多かった。目視観察では、両地点ともマガキ、コウロエンカワヒバリガイ、フジツボ類が優占し、お台場ビーチ側に位置するSt.A1では死殻が多かった。

(3) 魚類

魚類調査では、4回の調査を通して軟甲綱4種、硬骨魚綱17種の計21種が出現した。出現した魚類の多くは幼稚魚であり、生活史の初期に調査地点周辺の碎波帯を一時的に利用しているものと考えられた。

写真1に示すトゲウオ目ヨウジウオ科のガンテンイシヨウジが8月及び9月の調査で確認された。本種の生息域は太平洋岸では伊豆半島以南とされており、これまで東京湾での報告事例はない。

(4) 希少種及び外来種の出現状況

本調査における出現種のうち、貝類ではカミスジカイコガイダマシが環境省版レッドリストで絶滅危惧Ⅱ類とされている。またウネナシトマヤガイは東京都版レッドリストでは絶滅とされているが、本調査では生息が確認された。魚類ではビリング及びヒメハゼが東京都版レッドリストで準絶滅危惧に指定されている。

外来種については、ムラサキガイ、コウロエンカワヒバリガイ、タテジマフジツボ、シマメノウフネガイ、ホンビノスガイ、ヨーロッパフジツボの6種が「我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト(生態系被害防止外来種リスト)」で総合対策外来種とされている。この他にウスカラシオツガイ、イッカクモガニ、マンハッタンボヤの3種の外来種も確認された。

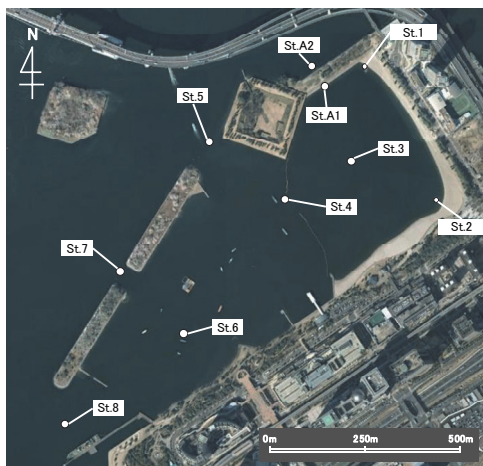


図1 調査地点



写真1 お台場海浜公園で採取されたガンテンイシヨウジ

本種の生息域は太平洋岸では伊豆半島以南とされており、これまで東京湾での報告事例はない。一時的な迷入の可能性もあるが、今後の出現状況を継続的に調査し、環境変化等との関係を検討する必要があるものと考えられる。



写真2 お台場海浜公園で採取されたウネナシトマヤガイ

本種は「東京都の保護上重要な野生生物種（本土部）～東京都レッドリスト～2010年版」で【絶滅】とされている。お台場海浜公園のみならず、2013年度には勝島運河でも本種の生息が確認されており、東京湾沿岸での再調査が望まれる。